

DISCOVERY

神戸大学医学部附属病院 根宜 典行

1 週間の研修が終了し、思ったことは「参加して良かった」である。

この海外研修に参加した目的は心臓 CT の技術を学び、3DLab Center での画像処理技術や品質管理、運用方法などを知ることであった。

心臓 CT での講義は、被ばく低減についての技術的な内容であり、日本と同じく逐次近似再構成を用いるなど、被ばく低減への関心が高いことがわかった。3DLab Center は 2 か所あり、そこには画像作成の専属技師とデータベースコーディネーターが配属され、放射線技師や PhD などが詳細なマニュアルを作成しており、常に安定した画像を提供している。また個人のレベルアップのため、データベースとして個人の成績をグラフ化し、読影医からの作成画像に対する意見のフィードバックをおおぎ、所見と確認するカンファレンスを行うなど教育環境もすばらしかった。スタンフォード大学の敷地から少しはずれた場所に「STANFORD MEDICINE IMAGING CENTER」があり、CT と MR が設置されている。施設内は来院する患者に優しい環境づくりがされており、今後、当院でも参考にしていきたいと考える。

また、1 週間ともに過ごすことでできた仲間は、私の技師人生にとって大きな財産となった。研修後に宿泊先で行ったミーティングでは「これからの技師について」や「技師の教育」などをテーマに行ったディスカッションにて熱く議論がされ、参加者すべてが高い志をもっており、大きな刺激を受けた。今後もこの仲間と関係を持ち、共にレベルアップをしていきたいと考える。

アメリカでは研究する技師と臨床を行う技師が分かれている。日本はほとんどの施設の技師は研究と臨床を混在しながら日常業務にあたっている。アメリカと日本のどちらが正しいのかはわからない。私自身、今できることは、臨床を行う中で研究テーマを発見し、その目的はより良い画像を提供するため、また患者に優しい検査を施行するためということをおぼれてはいけないと考えている。

最後にこの研修機会を与えていただいた、日本放射線技術学会関係者の皆様、神戸大学医学部附属病院放射線部の皆様、また現地でご尽力いただいた GE ヘルスケア・ジャパン株式会社およびスタンフォード大学の皆様に深謝申し上げます。



CHARLES T. STANLEY と Clark Center にて